

《紹介記事》

「センチメンタル・和歌山」の取り組み ～全国展開支援事業の採択を受けて～

和歌山商工会議所 企画調整部

次長 にしやま しげる

「センチメンタル」、この言葉から人は何を連想するだろう。何も感傷的といった直接的な意味に限らず、人は誰もが郷愁や懐かしさを感じる場所、あるいは、癒しややすらぎを覚える場所を持っているものである。

ある人は、幼い頃に家族と過ごした場所を、また、ある人は、甘酸っぱい初恋の思い出を感じさせる場所を思い浮かべるのかもしれない。

和歌山商工会議所では、平成18年度、国の「全国展開支援事業」の採択を受け、そうした人々の忘れられない思い出の詰まった場所、つまり「センチメンタルな場所」を、そこにまつわるエピソードとともにご応募いただき、全国に発信する取り組みを行っている。

それが「センチメンタル・和歌山」の事業であり、観光振興事業としては、おそらく全国で初めての事例であると自負している。

観光振興を図っていくことは、地域に潤いと活力を生む大きな要因となることから、近年、国においては、観光立国の実現に向け、平成18年12月、「観光立国推進基本法」を制定し、訪日外国人旅行者数を平成22年までに1,000万人に引き上げるなどの目標を盛り込んだ「観光立国推進基本計画」を策定、また、平成20年度には観光庁の新設を予定するなど、積極的に観光振興に注力しているところであり、その重要性はますます高まるものと思われる。

本県においても、平成16年7月の「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録を機に、紀南地域の観光客数は比較的順調に推移しているものの、当地和歌山市の観光客数は一進一退を続けており、今後、時代のニーズを見据えた観光振興策が望まれるところである。

こうした状況も勘案し、当所では、観光振興を本市の活性化を図るための重点事業のひとつとして捉え、平成15年度には「わかやま観光産業推進会議」において、また、平成17年度からは「わかやま観光客誘致プロジェクト（委員会）」を組織し、首都圏住民への和歌山に対するアンケート調査の実施や観光シンポジウムの開催、さらに、観光に企業見学を組み入れた産業観光への取り組みなど、本市への集客増を図るため様々な取り組みを行っている。

「センチメンタル・和歌山」もこうした事業活動の一環であり、それまでの取り組みを

踏まえ、委員会において自然に湧出されたものである。

平成19年2月、この「センチメンタル・和歌山」の各スポットを紹介する写真展を大阪のなんばパークスにおいて実施したところ、老若男女を問わず多くの方々に来場いただき、成功裡に終了することができたが、中でも、70歳代も半ばくらいの老夫婦が1枚の写真（和歌浦の写真）の前で足を止め、懐かしそうにそれを眺めていたのを思い出す。

私その前で記念写真を撮ってあげると、ご主人がまるで遠くに想いを馳せるかのように、戦時中、少年時代を和歌山市で過ごした思い出を語ってくれたのが今でも強く印象に残っており、このように、1枚の写真やそこに込められた応募者のそれぞれの想いが、訪れた人々に感動や郷愁を与えられたとすれば、この事業の大きな成果の表れであったと改めて感じる次第である。

平成19年度においても前年度同様「全国展開支援事業」の採択を受け、観光キャラクターの選定やセンチメンタル和歌山のスポット等を巡る体験ツアーを実施しているところであり、引き続き、本市の魅力を広く発信できればと考えている。



センチメンタル・和歌山 写真展

「センチメンタル・バリュー」

という言葉がある。これは感情や思い出の価値と訳され、最近の街づくりの手法にも用いられているが、日本人は生まれながらにして遺伝子の中に"濡れた"感覚を組み込まれているようで、明るく開放的な歌や映画よりも、もの悲しい旋律やストーリーに惹かれてしまいがちである。

例えば、昭和53年、山口百恵の歌唱で大ヒットした「いい日旅立ち」という歌がある。当時の国鉄のキャンペーン曲として、連日のようにテレビで放映されていたので記憶されている方も数多いと思う。

ヒットの要因も彼女自身の魅力や歌唱力など、いくつか挙げられるものの、このタイトルからは想像できないような濡れた曲調となっていることも見逃せない。まさに日本人好みなのである。

そうした日本人の「センチメンタルな旅」への憧憬や言葉の持つ響きが、この事業の展開により多くの人々の共感を得、和歌山市への観光客の増加につながれば、企画・運営に携わった担当者のひとりとして、こんなにうれしいことはない。